東京工業大学　産学協働プログラム
「人生100年時代の都市・インフラ学」

人生１００年時代の豊かな ライフシーン　Vol.3

チーム③：住まいと暮らし方

座長：永野敏幸（株式会社佐藤総合計画）
担当教員：浅輪貴史

2021年4月21日
資料作成：坂村圭

【再掲】これから３回のワークショップが目指すこと

人生１００年時代の豊かな住まいと暮らし方を創出する
都市・インフラのデザイン要件の抽出

－住まいと暮らし方の「豊かさ」とはどのようなものかを説明できるようになる

－人生１００年時代の「豊かな」住まいと暮らし方を想定できるようになる

－人生１００年時代に住まいと暮らし方の「豊かさ」を創出するために、都市・インフラがどのような要件を満たすべきかを理解する

人生100年時代に向けて都市・インフラにできること

「人生１００年時代」には、ライフシフトをはじめとして、生産年齢人口の減少、医療・介護需要の増加、IoT時代の業務変化、インフラの老朽化、地球環境問題の深刻化など、様々な社会変革への対応が求められます。
本プログラムでは、このような社会変革に対応した「都市・インフラ」のデザインを行うことで、豊かで持続的な未来を切り開いていくことを最終目標としています。

これは決して、都市・インフラが、新たな経済システムを構築することやガバナンスの仕組みを考案することより優れていると考えているからではありません。むしろ、新しい経済活動や政治を選択し、創造するために、都市・インフラが現在とは異なる形で作られるべきだと考えています。

都市・インフラの形態は、私たちの価値観を具現化するものです。優れた形態の都市では、参加と協働が促進されます。そのような都市では、回復力があり多様性の高い社会が実現します。

人生100年時代の変化を支え、人々の出会い・自然への気づき・新たな学びを促進し、豊かな暮らし・移動・働き方の舞台となる、都市・インフラの将来像を話し合いましょう。

本日の中心的な議題

住まいや暮らし方の変化を支える都市・インフラとは

－人生100年時代の住まいと暮らし方の変化（前回の振り返り）

－住まいと暮らし方の変化を支える都市・インフラ

－5月25日の全チーム合同中間報告会について

（付録）豊かさのふり返りのまとめ／ライフステージに応じたライフシーン（統計資料）

【これまでとこれからの議題】

第1回：住まいと暮らし方の「豊かさ」とはどのようなものか

第2回：人生１００年時代に住まいと暮らし方の何が変わるか

本日のタイムスケジュールと進行について

○タイムスケジュールと進行

ワークショップの全体時間は３時間(14:00-17:00)です。進行や時間配分はグループ座長に一任させていただきます。

事務局からはチーム内で行っていただきたい議題（ワーク）を数点提示させていただきます。この議題を中心に自由に議論を行ってください。

○本日議論していただきたいこと

（work1）人生100年時代の変化を都市・インフラから考える

（work2）全体フリーディスカッション

○本日の記録とその共有について

議論いただいた内容はビデオ記録を残すだけでなく、書き起こしを事務局で行います。これらの結果は人生１００年のホームページでアーカイブさせていただきます。

【前回のふり返り】

人生100年時代の変化を深掘りする

前回(2021.3)のワークショップの議論をまずは振り返ってください。
次ページから、全グループの人生100年時代に関するディスカッションで、頻出した「変化＝シフト」をまとめています。これらの「変化＝シフト」を確認したうえで、チームでさらに追加・修正したい項目を話し合ってみてください。

人生100年時代とは？

||

① 変化の時代

長寿化という身体の「変化」は、わたしたちの価値観や意識を「変化」させ、「出会い」「働き方」「住まい」「移動」「自然とのつながり」「学習」などの全てのライフシーンの「変化」を促す。このような人生100年時代の「変化」には、身体的・精神的な活力と経済・社会的資本が必要となる。人生100年時代の都市・インフラには、すべての人の「変化」を支える空間と仕組みを備えることが求められる。

核家族が進んでいった先として、家族も個々人の動きが広がる変化
目的に合わせて生活圏・一緒に暮らす生活者（コミュニティ）を変えられる
SNSのよ同じ趣味・趣向・仕事などの関係構築が進む

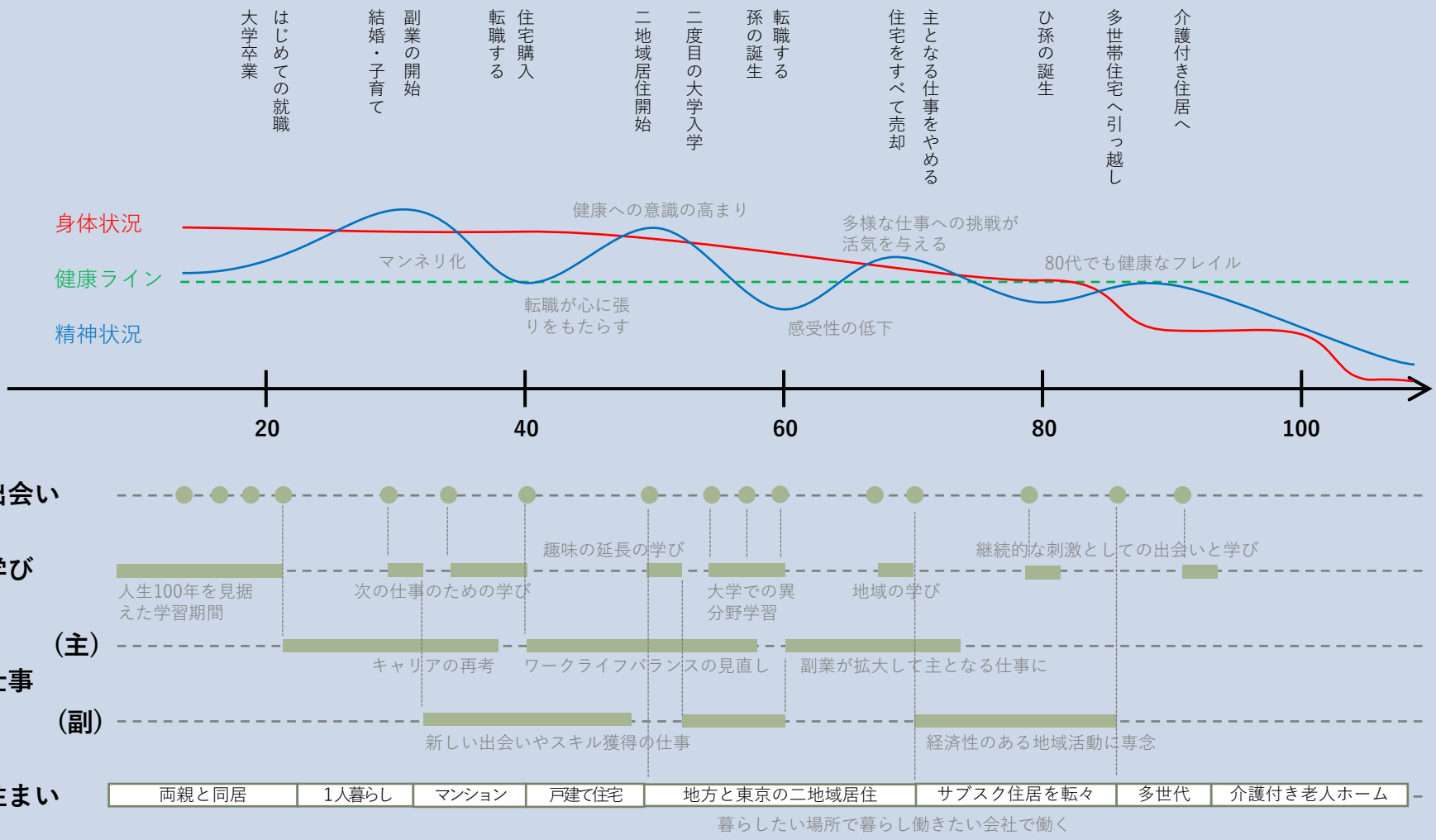
② 選択の時代

人生100年時代の「変化」をとりいれるかどうかは、個人・社会の「選択」による。このため「変化」は一様に起こるのではなく、多様なライフスタイルの人々が社会に混在する状況が生まれてくる。「変化」を押し付けるのではなく、それぞれのライフステージを能動的に歩んでいくための様々な「選択肢」に、すべての人が容易にアクセスできる都市・インフラを整備することが求められる。また、多様な価値観を持つ多世代の人々が一つの組織・地域で共創できる環境を生み出すことが必要となる。

③ 豊かさの時代

人生100年時代の個人・社会の究極の目標は、「豊かさ」の追求になるべきである。長寿化は、人生の転機を増加させ、「変化」と「選択」の機会を幾度も提供する。一方、成熟社会に突入したわが国は、際限のない経済成長の代替となる新たな目的を希求している。不確実なこれからの100年の指針として、多様な「豊かさ」の実現という究極の目標を中心に据えることで、個人・社会が歩むべき道に戸惑うことなく持続的な発展を遂げることができる。この際に、都市・インフラは、多様な個人の豊かさと社会、地球環境の豊かさが共存できるように、様々な目標を重ね合わせ、折り合いをつけていくことに貢献すべきである。

人生100年時代のマルチステージ化を解剖する



社会のシフト（AI・IoTなどのテクノロジーがシフトを促進）

長寿化が起因のシフト…多世代参画・交流・共生社会／共助社会（福祉・介護）／多様な価値観・暮らしの混在／家族構成の変化
マルチステージ化が起因のシフト…副業の増加／知縁型コミュニティの増加／高齢者の社会参画進展／社会改良事業増加／ライフスタイルの多様化
成熟化が起因のシフト…経済性よりも豊かさを追求する価値観の顕在化／地球環境保全意識の高まり
新しい社会課題？…経済・教育格差による「寿命の格差（お金持ちでないと長寿になれない）」「変化の格差（マルチステージ化したくてもできない）」

それぞれのタイミングで住まい方と暮らし方を選べる時代を迎えるためには

人生100年時代には、人生の転機や家族構成の変化の機会が増加し、自分の生活に適した住まいや暮らし方が幾度も変化することが予想されている。これまでは住宅購入は一生に一度の出来事で、終の棲家とする人が多かったが、健康状況やライフスタイルの変化に応じて、住宅の再購入やリフォームなどの手入れをする人が増加していくだろう。さらに、働き方の多様化により職業や職場に縛られることなく、自由に住まいを選択できるようになるかもしれない。

核家族が進んでいった先として、家族も個々人の動きが広がる変化
目的に合わせて生活圏・一緒に暮らす生活者（コミュニティ）を変えられる
SNSの同じ趣味・趣向・仕事などの関係構築が進む

多様な住まいの選択肢は多様なライフスタイルを生み出す。ベースとなる住居を中心とした一地域居住、ずっと同じ自然豊かな場所に住みながらのリモートワーク、サブスク住居を転々とするような暮らし方。一方、これまでわたしたちは一つの場所に住居を構えて長く暮らすことで、地域コミュニティとのつながりを創出し社会資本を蓄積してきた。土地や時間に縛られない暮らし方が可能になった時に、このような地域とのつながりをいかに担保するかは課題の一つとなるだろう。

では、多様な住まい方や暮らし方が共存できる時代を実現していくために、都市・インフラはどのような機能を兼ね揃えなければならないだろうか。その空間像、社会的な仕組み、サービスの在り方などに加えて、変化を取り入れる際の課題を考えていきたい。

【その他の人生100年時代の「変化＝シフト」に関する言及】

・働くことが長くなることで、プライベートの時間の充実を求める人が増える
・健康に豊かにゆっくりと暮らしを営む、賢いスローライフの出現
・住んでいると健康になっていくような住居の出現
・カスタマイズできるプレーンな住宅とライフシーンに特化した特徴的な住宅の共存

【Work 1】

核家族が進んでいった先として、家族も個々人の動きが広がる変化
目的に合わせて生活圏・一緒に暮らす生活者（コミュニティ）を変えられる
・仕事などの関係構築が進む

ライフシーンを都市・インフラから考える

住まいと暮らし方の変化を都市・インフラから捉えなおしてみましょう。
どのような都市・インフラが、人生100年時代の働き方や仕事の舞台となり、人と人とを触発し、人生を豊かなものにしていくでしょうか。
2021年6月からは、ここでとりあげた都市・インフラに着目して、全3回で新しいデザインのアイデアをより具体的に話しあっていく予定です。これまでの議論を振り返り、人生100年時代にアップデートしたい都市・インフラを考えてみましょう。

都市・インフラをシフトする（グループワーク：30分程度）

１）これまでのワークショップの議論を振り返り、**人生100年時代にどのような「住まいと暮らし方」のライフシーンを創出したいか**、**特定のシーン１つを**書き出してください。

２）**上記のシーンが、なぜ人生100年時代を豊かにするか、その理由をご記入ください。**理由を考えるにあたっては、「**現在のライフシーンを取り巻く状況**」「**人生100年時代に想定される変化**」「**どのような豊かさを私たちの暮らしや社会にもたらすか**」という観点から考えてください。

３）**上記のシーンはどのようにすれば、個人・社会が積極的に受け入れるようになるでしょうか。また、豊かなライフシーンを創出するために、都市・インフラをどのように変えていくべきかをご記入ください。**都市・インフラのデザインのディテールやプロセスは今後のワークショップで改めて議論を積み重ねていく予定です。今回は、たたき台となるようなアイデアをご提示ください。

What　人生100年時代に向けてどのような住まいと暮らし方のシーンを創出すべきか

回答欄：

現在のような仕事や学業などによる地域縛りとなる住まい・暮らし方から、目的にあわせた場所での住まい・暮らし方への変容

Why　なぜ上記のシーンを創出しようと思ったか

1）現在のライフシーンを取り巻く状況

回答欄：

場所に依存しない働き方、教育の環境が一般化し始めてきた
東京や大都市への人口集中への見直しが、以前よりまともに議論されて来ており、地方移住なども以前より増える可能性あり
リアル以外にもSNSのようなバーチャルでのつながりも拡大

2）人生100年時代に想定される変化

回答欄：

核家族化から各個人化としての動き方ができる様になる
リアル/バーチャルによる関係（コミュニティ）を複数保有し、
目的に合わせて切り換えて暮らす変化

3）新しいライフシーンはどのような豊かさを私たちの暮らしや社会にもたらすか

回答欄：

考え方、相互補完できる関係性をうまく作り出せる仕組みが加わることで、生きづらさ、貧困などのマイナス面を削減できるのではないか
さらに、自ら変容できる人はよいが、受け身な人（レイトマジョリティ）は近しい人と誘い合う仕組みがあれば変化していけるのでは

How　上記のシーンの創出のために変化をどのように取り入れ、都市・インフラをどのように変えていくか

1）ライフシーンの変化＝シフトの取り入れ方

回答欄：

街というか自治体にて、どの様な趣味や年代やライフステージなどを優先して取り込むかの変化が出てくるのでは？
地域振興の特色がかわってくるなど

2）着目する都市・インフラ

回答欄：

住居（空き家などの利用）
低密度の居住状態での生活維持（移動・買い物・医療・行政サービス）

＊ここで提示いただいた都市・インフラを、「どこで」「だれが」「どのように」実現していくか、そのディテールとプロセスを今後話し合う予定です。

お名前：　菊池　克　（NEC）

本日のまとめ

都市・インフラのうち

に着目して人生１００年時代のデザインを考える。

【Work 2】

全体フリーディスカッション

次回は、これまでのディスカッションの内容を全チーム合同で共有する予定です（発表10分／パワーポイント使用／形式自由）。過去３回の議論を今一度振り返り、発表内容を話し合ってください。

＊座長、担当教員からのワークを行っていただいても構いません 。

1）住まいや暮らし方の豊かさに関する議論

回答欄：

2）人生100年時代の住まいや暮らし方に関する議論

回答欄：

3）これからのワークショップで着目する都市・インフラについて

回答欄：

【付録１】

豊かさの議論のまとめ

過去２回のワークショップで行われた「豊かさ」に関する議論をまとめています（事務局で論点を明確にするために、加筆・修正を大幅に行っているので、そのままの議論とは異なります）。これからの都市・インフラのデザインを考える際に、ご活用ください。

出会い・コミュニケーションの豊かさ

Team 1の議論ハイライト

自分がリニアに変わっていくための「ほどほど」のコミュニケーション

＞寿命が100年に伸びると自動的にマルチステージ化がはじまるわけではない。自分がゆるく変わっていかないと、長く伸びたワンステージにしかならない。だから、**自分が変わることに価値を見出せないと、マルチステージ化しようとも思わない。**＞ゆるく変わっていけることが重要。そのためには、**リニアに変わっていく自分を認めてもらうことや、少し失敗して変な風に変わってしまった自分を許してもらえることが必要。**＞やっぱり「自分でこういう経験をしてきた」というところを人に見せることで幸せを感じることがある。だから、自分が変わっていく際に、出会いやコミュニケーションっていうのは重要だと思う。＞**「ほどほどで」「心地よくて息苦しくない」「ゆるい」コミュニケーション**ができる相手が必要。＞人とのコミュニケーションからは、自分が想定しないような知識が偶然得られることがある。それは、インターネットやスマホからは得られない体験。＞最近は、ツイッターやインスタでガンガン発信していくことが是とされている。でも、**いまのデジタル社会は、その時々の何気ないコミュニケーションが刻印されてしまって、文字が独り歩きしてしまう怖さがある。**この何か一瞬たりとも油断できない感じが、豊かさとは逆の圧迫感のように感じている。＞**自分が変わっていくためには、失敗してもいい環境を整えてあげることが重要**なのでは。

これからの世代の豊かさは「ふっくら」で「ゆったり」したもの

＞「豊か」の辞書的な意味は「満ち足りていて不足が無い」という量的な充足を指し示すものと、「ふっくらしている、ゆったりしている」という、質的量的に大きくて余裕があったり、緩やかな状態を指し示すものがある。＞**昭和の世代がすぐに思いつく豊かさは、量的な豊かさだったと思う。**でも、いまの世の中では本当に何かが量的に欠乏しているものって少ない。＞いまの若い世代の人たちは、余裕があるみたいなところに豊かさを感じ始めているのでは。**人生100年時代には豊かさの指標がどんどん変わっていくような気がしている。**＞現代の社会のニーズだって、相当掘り起こさないと見つからないと思う。例えば、誰かとコミュニケーションがとれるみたいなことは社会的に実装できてしまっているけど、コミュニケーションに完全に満足しているわけではない。むしろ、**今の人は一周周ったところに豊かさの欠乏があるような気がする。誰とでもコミュニケーションとれるんだけど、なんかこれ違うみたいな。**＞ネットが無い時代は不便だったっていっているけど、携帯電話から解放されたり、わざわざオフラインで人と出会うことに豊かさを感じ始めているのかもしれない。＞多様な世代が多様な豊かさの指標を持っている。違った価値観を認めてそれらが共存できるようにしたい。**多様な豊かさを認めあいながら多様な考えを持つ世代をつなぎ合わせることに取り組まなければならない。**

パラレルな働き方を選択できるようにするには

＞人生は一度きりだとしても、１人の人が複数のストーリーを歩んでもいいし、いくつもの役割を担ってもいい。**パラレルな働き方によって個人が新たに得られる豊かさがある。**＞パラレルな働き方は、４本の脚で立つ椅子をつくっておくようなもの。１本の脚がぐらついたとしても、他の３本の脚でバランスをとっていきなり倒れなくしておくようなもの。＞でも、**どうしたらパラレルな働き方にシフトできるのだろうか。**＞電車のポイントが切り替わるように、いきなりパラレルな働き方にシフトするということはできない。**ライフシフトはグラデーションのように起こっていく。だから副業につながる種を少し前からたくさん巻いておくことが重要。**この種は自分の趣味だったり得意なところを探していくというよりは、誰かがこのままだと悲しいことになりそうな時に、自分に何かできないかと考えて活動を始めるときに育つことが多い。＞一方で、新しいことに挑戦することやパラレルな働き方にあこがれてもなかなか踏み出せないことがある。今ある安定を放棄することにリスクを感じたり、経済的な困難を想像してしまう。**いまの社会には、ライフシフトを決断することに対して何か障害があるような気がする。**＞例えば、**ライフシフトするような人は労働の対価をどのように考えているのだろうか。**＞最近の若者は、仕事に対する考え方が二極化しているような気がする。一つは自分の評価というものがお金になって必ず跳ね返ってきてほしいという考え方。もう一つが、仕事から得られるお金は一定でいいから、お金じゃない価値（スキル、キャリア、経験、交友関係など）をどんどん蓄えたいという考え方。**お金になるかもしれないけど、そんなにお金に拘らないで他の価値を求める仕事を、パラレルにどんどん起こしていくみたいなのに共感が集まり始めているのでは。**＞ベーシックインカムみたいなものがあれば、冒険や失敗できる雰囲気がでてきて、パラレルな働き方を選択する人が増えるかもしれない。＞パラレルな働き方をしやすくする都市・インフラってどういうものだろうか。都市・インフラは、機能を更新とか整備する役割から、パラレルな活動の受け皿として、今までとは違う目的の場所を生み出してあげることに役割を変えていくのかもしれない。

ライフシフト時代の会社や組織の単位とは

＞個人の人生の豊かさを考えるなら、なるべくその人が興味を持ったことをやらせてあげて、いろんな経験をさせてあげることが重要。それに、これまでにない新しいものを生み出していくためにも、**会社に人を縛り付けたり、ルールやスタイル（出社時間、場所、服装など）を押し付けるべきではない。**むしろ、それぞれが豊かに仕事ができるような環境を自由に選択できるようにしてあげることが必要。＞では、程度の差はあれ、個人の意思を制約してしまう、会社や組織というものは不要なものになっていくだろうか。＞**会社や組織にいることで得られる知識やスキルや意味は、やはり存在している。**＞個人では達成できないような大規模で複雑化した仕事もたくさんある。＞そうであるならば、人生100年時代の個人の豊かさを実現してくれるような組織をどのようにデザインし直せばいいだろうか。＞いま、会社も少しずつシフトしはじめている。プロジェクトが立ち上がる際には、必要な人を社外から集めて専門家チームが組まれる。社内のひとを一生抱え込んでやりくりするようなことは減ってきている。＞**私たちは会社に縛られた働き方に不満を覚え始めている。会社も社員がただよりかかっているような状況を良いとは思っていない。**＞会社や制度が自分の人生のステージをぱっぱと決めてくれて、それに乗っかっていれば一生が過ぎるということはなくなっていく。＞個人と組織の両者の豊かさを実現していくには、お互いの目標を同一にするというよりは、それぞれの目的を認め合いながら個人と組織（としての自分）の共存関係を築くようなことが必要なのかもしれない。組織に属していることの納得感は重要。＞個人のコレクティブな知識や経験を共有していくことを目指すのであれば**会社や組織にも新しい単位ができてくるかもしれない。**

働き方・仕事の豊かさ

Team 2の議論ハイライト

住まい・暮らしの豊かさ

Team 3の議論ハイライト

同じシーンに遭遇しても豊かと感じられる時とそうでないとき

>**日常生活で同じ出来事が起こっていても、すごく不快な時もあれば、それを特に気にせずに受け流せるときがある。**例えば、子どもが夜泣きしている時に、睡眠不足であるとイライラしてしまうことがあるが、体調がばっちりな時には泣いている子供を見るのが楽しかったりする。>**豊かさを感じる背景には、自分の心のゆとりや精神的な安定さがあると思う。>そういった心のゆとりは、時間的な制約が無いときや価値観が共有できる他者が近くにいる時に生まれる。**>物理的な環境として、温熱や光が心地いいというのも精神を落ち着かせるのに重要なことだと思う。>安全性が確保されていたり自由であって、**身体的・精神的に余裕があるときに、日常の豊かさを発見することができるし、日常のシーンを豊かだと感じることができる。**>本来の豊かさは、内面的なところで、自分でしか手に入れられないものなんだと思う。

日常の暮らしに変化をもたらすスパイスとしての非日常性

>犬の散歩の時に公園の早咲きの八重桜に気付いたり、ベランダに植えている花が咲いたときとかに、何とも言えない満たされた気持ちになる。**何気ない日常なんだけど、単に何の変化もない日常は、味気なくて豊かじゃないと思う。**花が咲いたりとか、気持ちのいい風が吹き込んだりとか、もしくは実家に帰って改めて今までの生活を振り返るとか。そういう**日常のなかの変化や非日常性が豊かさの要因なのかと思っている。**>変化や非日常性を発見するということは、驚きとか喜びを伴う。小さな発見がスパイスとなって生活を豊かにしてくれる。>**日常の発見は、毎日が忙しすぎたりすると気づくことができない。**心のゆとりや余裕があることはやはり大事なんだと思う。>**変化や刺激が多すぎる日常を送っていても、このような豊かさを実感することはできない。**コロナの前というのは、街に出れば色々な刺激や欲望を書きたてるものであふれかえっていて、それに私たちが慣れてしまっていた。そういう環境に身を浸していると、日常の中の小さな変化っていうものを見落としてしまう。>大き過ぎない刺激や変化をうまく日常の中に取り入れることが重要だろう。

移動・モビリティの豊かさ

Team 4の議論ハイライト

どこでもドアとタケコプターの違いから考える移動の豊かさ

>**移動は目的地に行くための「手段」と捉えられる時と、移動自体が「目的」と捉えられる時がある。**前者は、毎日の通勤の移動に関わり、後者は旅行の時のモビリティの選択に関わる。＞手段としての移動の豊かさは、高速化、自動化、身体的負荷の軽減などによって実感される。この極限は「どこでもドア」みたいなものだと思う。移動から生じる制約を極力ゼロにして、移動中かそうでないかに関わらずなんでもできるようにすること（移動＋α）が、移動の豊かさを増幅していく一つの方向性だろう。＞目的として移動は「タケコプター」のようなものかもしれない。**目的としての移動の豊かさを考えていく際には、手段としての移動と違った側面が重視される。**＞手段としての移動の場合には、目的地から得られる豊かさ（点の豊かさ：ハワイで得られる豊かさ）しか感じられない。一方で、目的としての移動は、出発点と目的地を結ぶ移動体験の豊かさがもたらされる（線の豊かさ：東京からハワイへの移動とニューヨークからハワイへの移動では目的地が一緒でも豊かさは異なる。また、飛行機か船かの選択などで豊かさが変わる。）＞では、**どのようにしたら移動を目的化することができるか。**＞また、すべての移動を目的化することが、ほんとうに生活を豊かにするのだろうか。＞**手段としての移動と目的としての移動の選択肢を用意することが重要なのではないだろうか。**＞この場合、どのような移動に対して、目的化の選択肢を提示すればいいのだろうか。

子どもの時に感じたモビリティへのあこがれ

＞子供の時には、バスに乗ることや電車に乗ること自体がとてもわくわくする経験だった。それは、バスや電車が何か特別なもので、非日常で、初めての経験であったからだろう。＞**年齢が上がり経験を積み重ねると初めての経験は減ってしまい、非日常的な体験やそこから得られる豊かさは減少していく。**＞一方、**年齢を重ねて、経験を積むことで、新しい価値観を持つようになり、新たな視点から初体験を発見することもある。**＞大人になってはじめて行けるようになる場所がある。自分で自動車を所有して、自由にカスタマイズして移動できることがある。＞ライフステージごとに感じる豊かさは異なる。＞**人生のどのステージにいても豊かさを感じられるようにするには、どんな環境を整えていけばいいだろうか。**

人生100年時代の豊かさを感じる準備はできているか

＞自分で移動を自由に選択できるような環境がこれからどんどん整えられていく。時間も空間も気にしなくて、どのような移動もできるようになるかもしれない。**私たちはそのような未来から豊かさを感じる準備ができているだろうか。**リタイア後に本当に移動を自由に選択できるようになった時に、これまでにない移動を行い、豊かさを実感するのだろうか。＞あまりにも移動が容易なものになってしまったら、移動自体を行わないようになるかもしれない。＞だから、**移動することに目的を設けていくことが今以上に重要になる**と思う。＞例えば、体験をたくさんしてしまうと豊かさの実感は薄れる。そのような豊かさの減少を補うように、新たな移動体験を順次追加できる仕組みをつくることはできないだろうか。

自然とのつながりの豊かさ

Team 5の議論ハイライト

都市の中だからこそ味わえる自然の豊かさはあるのか

>**自然から感じる豊かさの経験には、田舎の自然や、もっと大自然・超自然から感じるものと、都市の中にもあるような身近な自然から感じるものとがある。**＞燕三条の小高い丘には、関東でみる水田の規模とは全く違う、自然の圧倒的な迫力と雄大さがある。一方で、横浜美術館の前の噴水で遊ぶ子供の写真も、それはそれですごく豊かで、音まで再現できるくらいに覚えている。＞大自然と都市の自然の豊かさの違いは、自然を五感で感じるとか、人と一緒に過ごすシーンになるみたいに、自然とのつながりかたの違いとも関係していると思う。＞都市の中の自然に着目すると、ビルに反射した光や、水に映った都会の景色もきれい。街中で夕日の中を自転車で散策する人がいて、その話し声を聞きながら、光があって、水があってみたいに。＞**建築の中には、建物とその周りの環境を何か意図して設計しているようなものがあって、これも都市特有の自然の豊かさを演出している。**外（自然）と中（建築）が一体化しているような感じ。鎌倉の旧県立美術館は、ある時間帯だけ光を反射して天井を明るく照らして幻想的な空間を生み出す。＞豊洲なんかは、本当にわずかな時間とタイミングの時にだけ、あんなに美しく見えるのかという瞬間がある。**それは、日常の中で見つけた非日常の豊かさみたいなものであって、そういった思いもよらない瞬間に都市のなかの自然の豊かさはみつけられる。**

都市で自然の豊かさを感じるための空間デザインと管理手法

＞都市の中で自然を感じるためには、少なくとも実物として自然物が都市の中にないといけない。でも、**都市の中で感じる自然の豊かさを考えるならば自然がたくさんあればあるほどいいというわけではない。**都市とのコントラストであったり、短期間で特別だからこそ感じる自然の豊かさがある。都市の中に小さい自然が点在しているのがいいのでは。＞即物的に自然が見えるという比率をあげていくことが、身近に自然に触れ合う環境をつくるためには必要だと思う。＞さらにいえば、目に入るだけでなくて、自分もその場所に行けるということが意外と重要かもしれない。＞**都市の自然の最低限のボリュームを考えることが必要だと思う。**小さいのがいいけど、単なる公園ではなくて、ヒキガエルが卵を産めるぐらいのものでないと自然の豊かさは味わえない。小さいといっても最低限の質と量のボリュームがあって、五感に訴えるようなものでないといけない。＞そういう**都市の自然の豊かさは、物理的なデザインに加えて管理という側面が重要になると思う。**手入れが全て行き届いているのか、それとも少し自由度があるのかというような。＞例えば、庭園のように管理され過ぎていると、鑑賞だけのように決まった用途使いしかできなくなってしまう。一方で、あまりにも管理されていないと、それは自分たちの手には負えないような状態の自然になってしまって、少なくとも豊かさは味わえない。その間くらいの絶妙な管理状態だと、安心して風を感じて太陽を浴びて生き物に触れることができると思う。＞**完璧な管理ではなくて、「自然は自然だよね」というある種の諦めのようなゆるい管理がいいのかもしれない。**＞そのような管理手法として、色々な人が自然をシェアするというのが相性がいいと思う。

学び・学び方の豊かさ

Team 6の議論ハイライト

100年間の学びのグラデーションと学び続けるための出口

＞若いころの学びは知識が無い状態から一つの専門分野を詰め込むように始まる。その時には余裕がなくて他のことに目を向けることは難しいものだが、それがある程度達成できると視野が広がっていく。 ＞**年齢を重ねていくとある分野に関して悟りを開く瞬間がある。**建築の構造を学んでいたのに、ある時から建築全体に興味を持ったり、人間そのものに関心をひろげたりするような人がいる。＞70歳になったときに20歳の時と同じ学びや学び方は必要ないと思う。高齢者になってからプログラミングを学ぶのは困難。**ライフステージにあった学びというのはあるような気がしている。**＞高齢者になって、コミュニティや地域社会に学びの目を向けている人が多くいる。そういった学びが趣味で終わるのではなく、ある程度の経済的な見返りを確保してあげて持続的に続けられるようになるといい。＞観光のように、**コミュニティや地域文化の学びを価値化してあげられるような社会や経済があれば、学びの二度目のサイクルが生まれるかもしれない。**>歳をとるほどやっぱり学びが双方向になって、がむしゃらにインプットし続けることがつらくなってくる。**学びとはき出しっていうか、インプットとアウトプットの双方向の状態が整っていないと学びはやっぱり楽しいものにはならない。**＞ライフステージによってインプットとアウトプットのバランスも変わったほうが豊かさを感じやすくなると思う。

学びのきっかけを生み出す能動的なマインドの大切さ

＞豊かな学びの背景には、自分の好奇心に応えてくれるようなものやこれまでに経験のないテーマとの出会いがある。＞**学びにはきっかけがある。きっかけがあって、ワクワクして、じゃあやってみようかって学びがはじまっていく。**＞好奇心を持つことはきっかけづくりにも重要。＞そういう意味では、学びの豊かさは心の持ちようの部分も大きいと思う。**もしかすると一番大事なのは、自分で豊かにありたいとか、豊かさを感じたいとかっていうマインドを持つことなのかもしれない。**＞自分の状況を客観的にみて、自分から豊かさを感じたいという思いにさせてしまうことが、学びのモチベーションの向上につながる。＞能動的に自由な時間を浪費してでも学びたいという意欲を持つみたいに、自分から取捨選択して学んでいくような感じ。＞そういうのって余裕がある状態が良い影響を与えると思う。全体の余裕が積極性を生んでいく。＞**学びを受動的なところから能動的なところに変えていく世の中の仕組みが必要。**もしくは義務的タスクを面白いものに変えていけるような発想が必要。

豊かな学びを誘発する環境づくり

＞最近、家で過ごしたり散歩をするようなことが多くなって、これまで見過ごしていた花屋さんに何となく入って、植物を飾ることに興味を持った。そこから植物の育て方や飾り方を学び始めている。＞**置かれた状況によって学ぶことって変わってくると思う。好奇心が向く方向ってシチュエーションによって変わる。**＞学びのきっかけを作ったり、学びを促進するような空間やシチュエーションは存在すると思う。＞ワーケーションで訪れた逗子の自然の中での活動や時間のゆとりは、企画づくりのような仕事にすごくマッチしていた。＞それが行き過ぎて、空間や環境が人に学びを強制してしまうと窮屈さを感じてしまう。**人の能動性を残したような学びを誘発する空間作りが重要。**

【付録２】

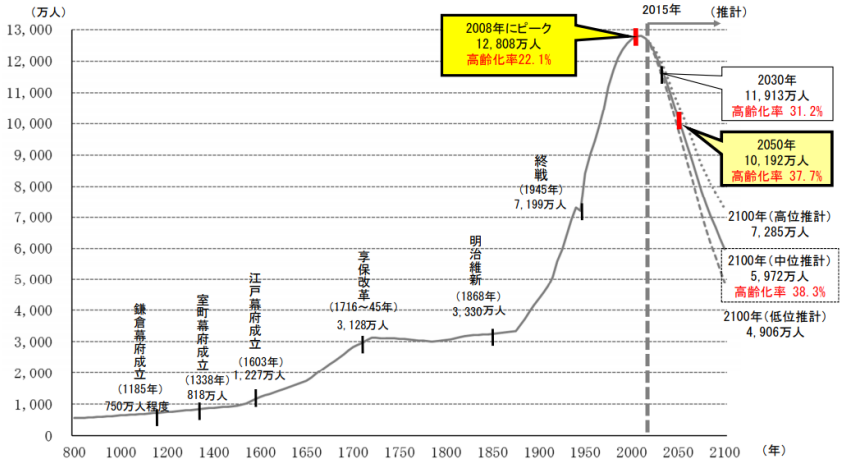
ライフステージに応じたライフシーン

既存の統計データをもとに、年齢ごとのライフシーンの変化をまとめています。いま起こっているライフステージごとの生活の特徴を、是非、人生１００年時代の構想に役立ててください。

付録【全体】

■日本の将来推計人口と高齢化率

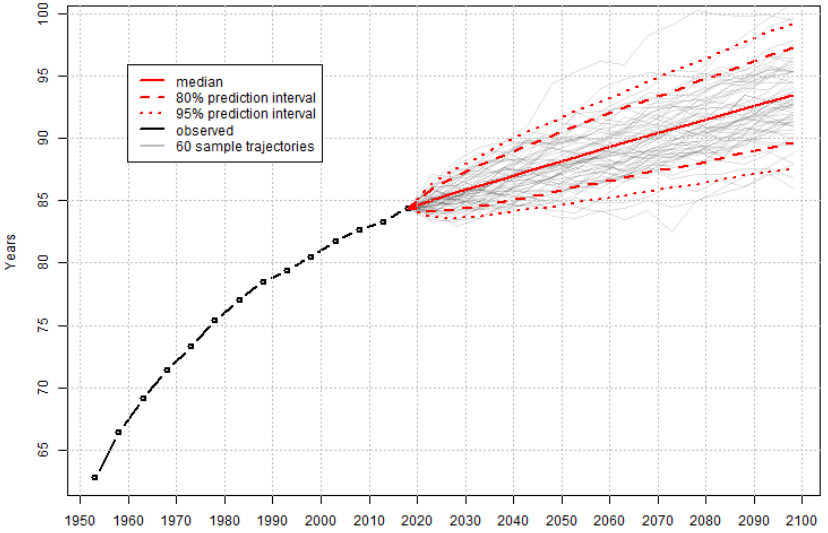
日本の総人口は、2008年をピークに減少傾向にあり、2050年には約1億人にまで減少する見込み。



（出典）1920年までは、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」（1974年）、1920年からは総務省「国勢調査」。なお、総人口のピーク（2008年）に係る確認には、総務省「人口推計年報」及び「平成17年及び22年国勢調査結果による補間補正人口」を用いた。2020年からは 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」を基に作成。

■日本の平均寿命確率的予測

寿命は年々増加しており、現在の寿命85歳、2100年には94歳になると予想（中位）。他の主要国も長寿化の傾向にある。



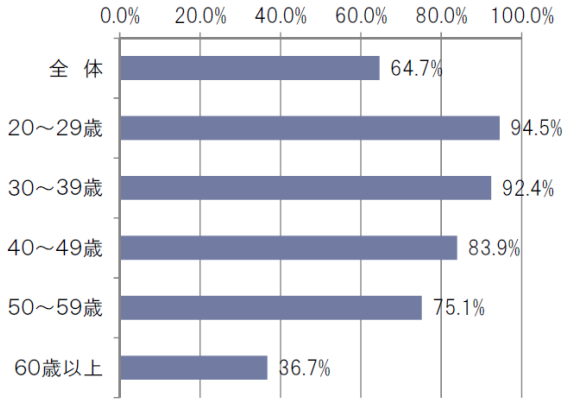
© 2019 United Nations, DESA, Population Division. Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO.
United Nations, DESA, Population Division. World Population Prospects 2019. http://population.un.org/wpp/

https://population.un.org/wpp/Graphs/）

付録【T1　出会いとコミュニケーション】

■年代別スマートフォン利用率（平成26年）

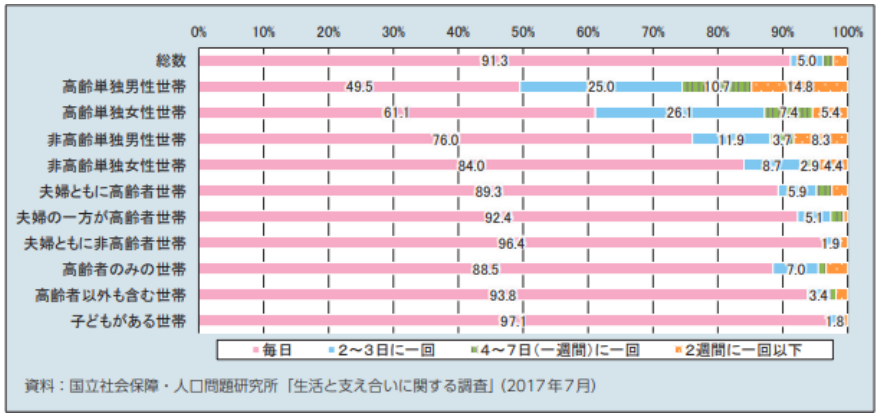
高齢者（60歳以上）におけるICT活用への抵抗がみられる



資料：総務省「平成26年通信利用動向調査（世帯編）」

■会話頻度　世帯類別（2017年）

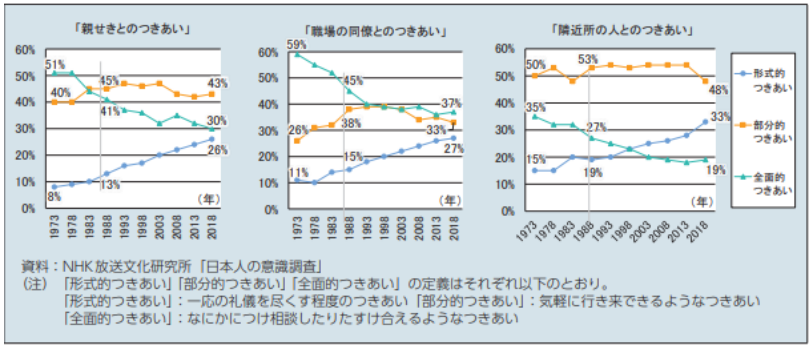
高齢（非高齢）単独世帯では男女とも毎日会話する会話頻度が低い



資料：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合いに関する調査」(2017年7月)

■付き合いとして望ましいもの

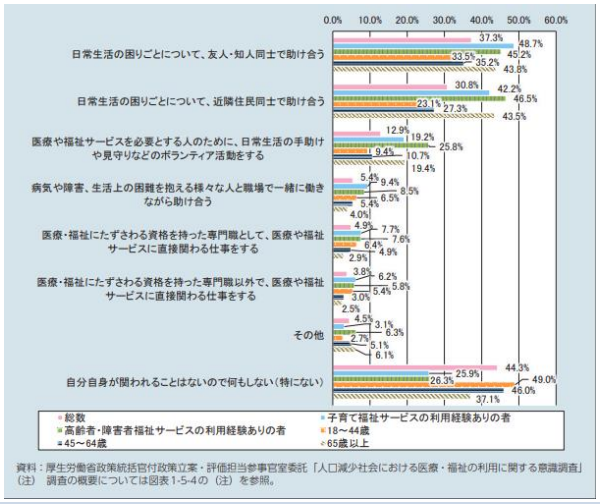
人々が「全面的つきあい」を避けるようになってきた



資料：NHK放送文化研究所「日本人の意識調査」
（注）「形式的つきあい」「部分的つきあい」「全面的つきあい」の定義はそれぞれ以下のとおり。
「形式的つきあい」：一応の礼儀を尽くす程度のつきあい「部分的つきあい」：気軽に行き来できるようなつきあい
「全面的つきあい」：なにかにつけ相談したりたすけ合えるようなつきあい

■暮らしやまちづくりへの関わり（これからしようと思うこと　2019年）

助け合い・ボランティアが大切だと思う人がどの年代でも多い

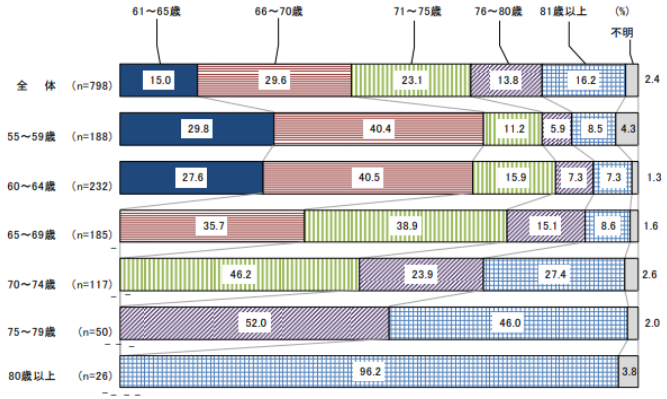


資料：厚生労働省政策統括官付政策立案・評価担当参事官室委託「人口減少社会における医療・福祉の利用に関する意識調査」
（注）　調査の概要については図表1-5-4の（注）を参照。

付録【T2　仕事と働き方】

■　何歳まで働きたいか（年齢別退職希望年齢）

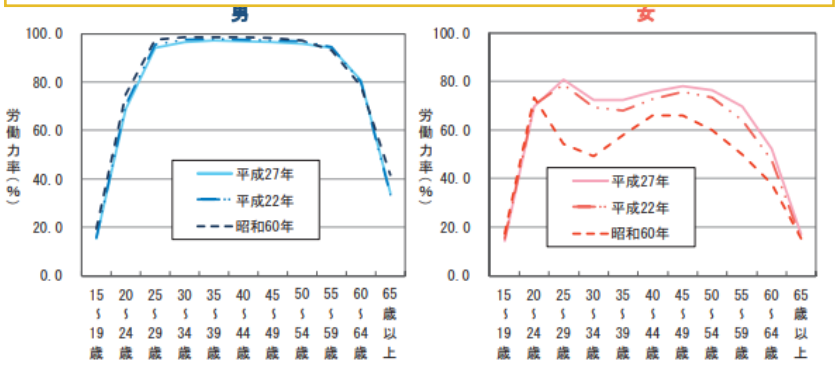
年齢階級の増加と共にいつまでも働きたい意識が上昇している



（出典：平成29年　内閣府「高齢者の健康に関する調査」（全体版））

■　年齢（5歳階級）男女別15歳以上労働力率　全国

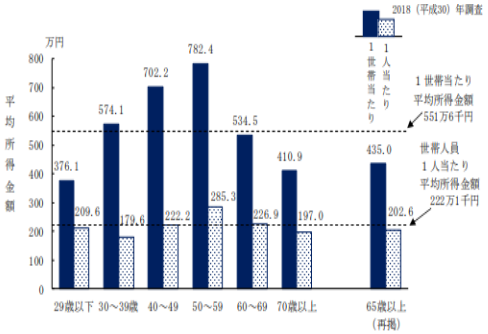
女性の労働力率は大幅に増加している（M字カーブの底が上昇）が、女性全体では最高値が8割強にとどまっている

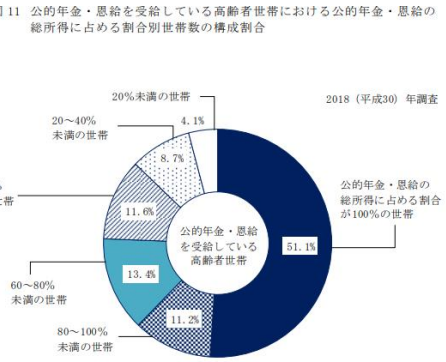


（出典：　国勢調査2015　ライフステージでみる日本の人口・世帯）

■　高齢者の所得

全世帯平均と比較して230万円ほど低く、年金・恩給を受けている人が多い

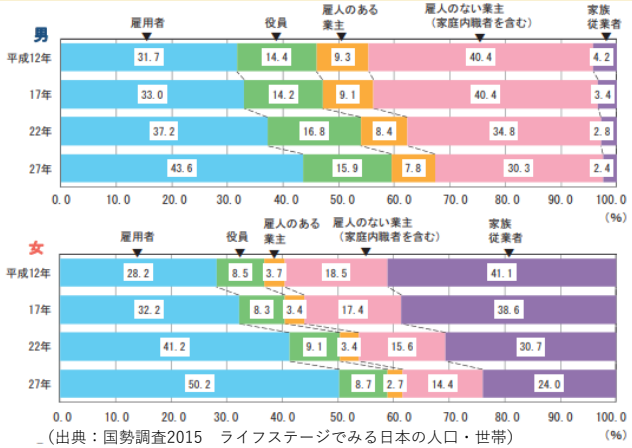




出典：厚生労働省「国民生活基礎調査」（平成30年）

■　従業上の地位、男女別65歳以上就業者の割合　–全国

平成27年には男女ともに高齢従業者の「雇用者」の割合が最も高くなった

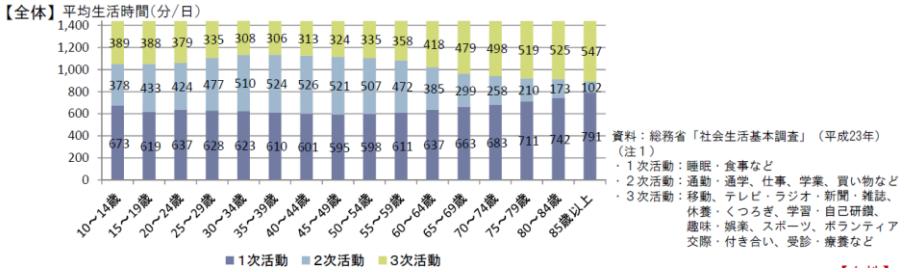


（出典：国勢調査2015　ライフステージでみる日本の人口・世帯）

付録【T3　住まいと暮らし方】

■高齢者の活動種類別の1週間あたり平均生活時間

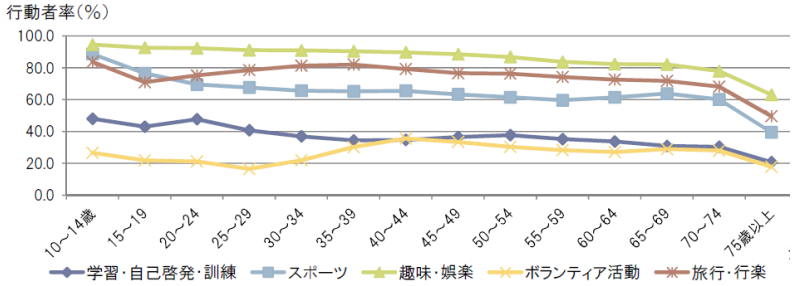
65歳以上では通勤や仕事以外の「3次活動」が1日の約35％を占める



（出典：国土交通省「高齢者の生活・外出特性について」）

■年齢階層別にみた自由時間での活動別行動者率

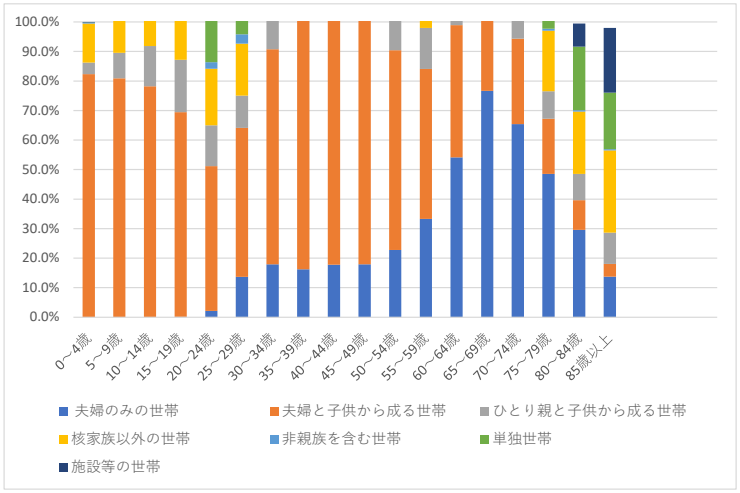
高齢者の自由時間の行動者率は非高齢者に比べると低い



（出典：総務省「社会生活基本調査」（平成23年）　国土交通省「高齢者の生活・外出特性について」より）

■ライフステージ別家族構成（世帯の種類・世帯の家族類型、年齢（5歳階級）別世帯人数の割合　全国）

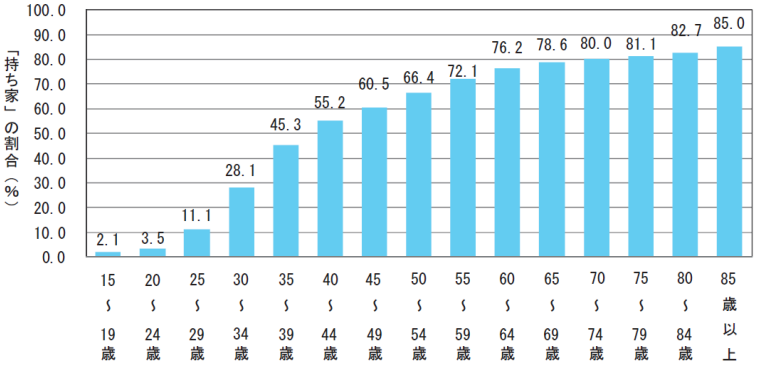
６５～６９歳を境に家族構成が多様化している



（出典：国勢調査2015）

■15歳以上世帯主の年齢（5歳階級）別住宅に住む一般世帯の「持ち家」の割合　ー全国

40～44歳で「持ち家」に住む割合が半数を超え、70歳代前半で8割を超える

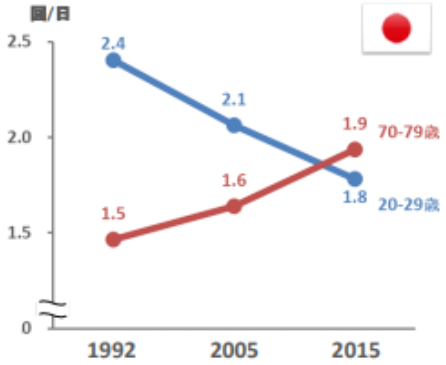


（出典：国勢調査2015　ライフステージでみる日本の人口・世帯）

付録【T4　移動体験とモビリティ】

■年齢階層別　一日あたりの移動回数

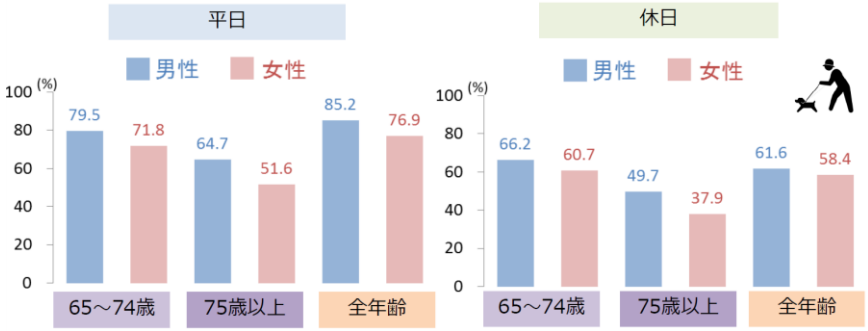
20代若者の移動回数は年々減少し、70代と逆転。元気な高齢者が増えてきている



（出典：国土交通省　平成27年全国都市交通特性調査　集計結果より）

■高齢者の外出率

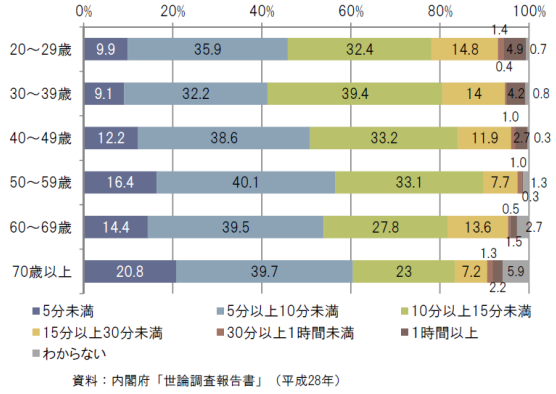
前期高齢者は全年齢と変わらないくらい外出している。女性よりも男性の方が外出している傾向にある。



（出典：国土交通省　平成27年全国都市交通特性調査　集計結果より）

■年齢階層別にみた自宅から駅やバス停までの許容距離

約半数の高齢者が自宅から１０分以上離れた駅やバス停を利用したくない

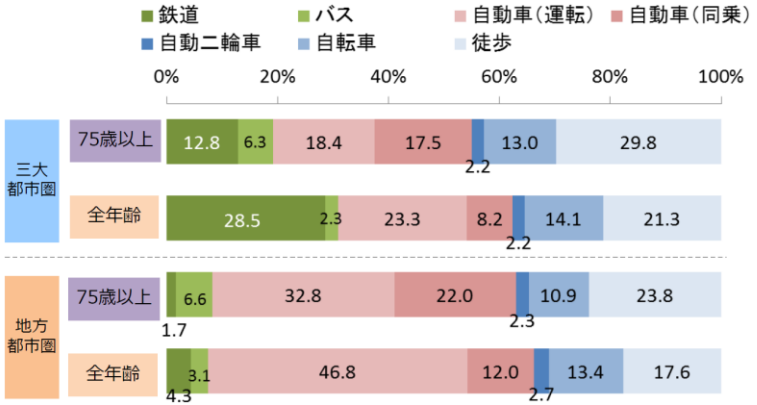


資料：内閣府「世論調査報告書」（平成28年）

（出典：国土交通省「高齢者の生活・外出特性について」）

■後期高齢者（75歳以上）の交通手段別構成比（平日）

後期高齢者は徒歩や自動者（同乗）での移動の割合が高い

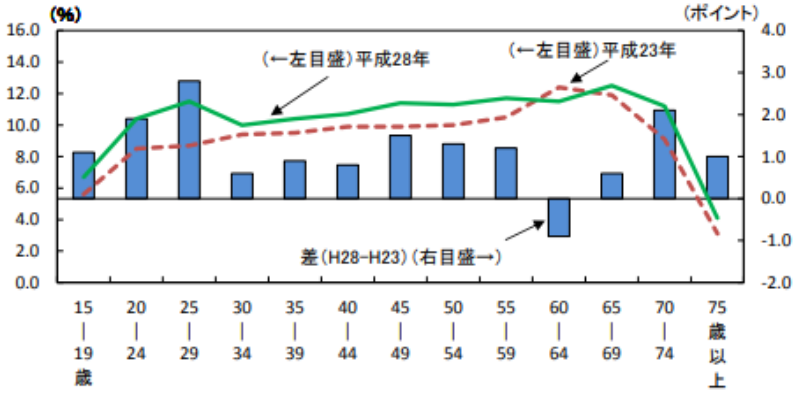


（出典：国土交通省　平成27年全国都市交通特性調査　集計結果より）

付録【T5　都市の自然の活用と管理】

■年齢階級別「登山・ハイキング」の行動者率（平成２３，２８年度）

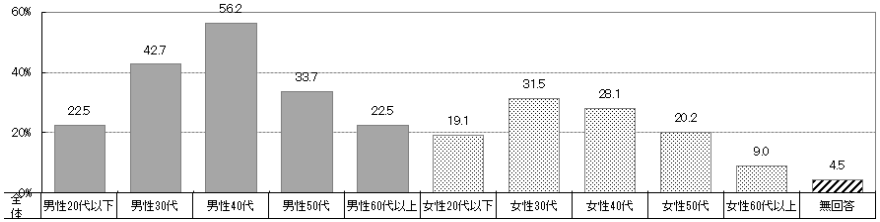
平成２８年には、5年前と比べると、60代前半以外でハイキング行動を行う人が増加している



出典：社会生活基本調査（平成28年度）

■エコツーリズムガイド常勤スタッフの割合（平成27年度）

エコツーリズムガイドの男性は60歳以上の割合が20代以下と同じで高い

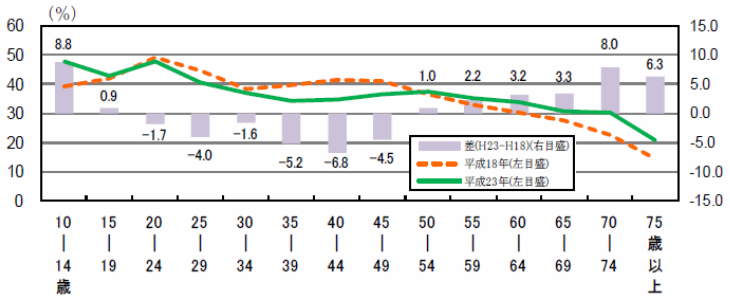


出典：環境省　エコツーリズムガイド等の国内実態調査（平成27年度）

付録【T６　能動的な学び方】

■年齢階級「学習・自己啓発・訓練」の行動者率（H１８，２３）

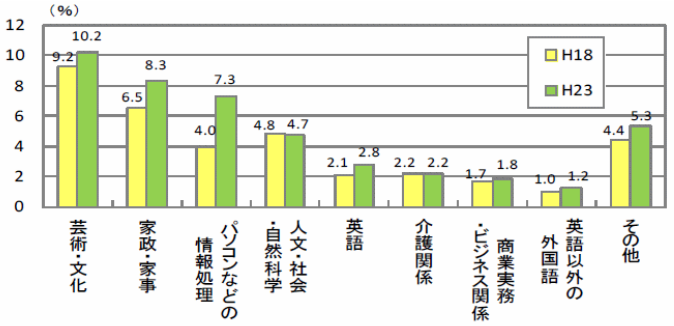
高齢（65歳以上）になるに従って「学習」の割合は減少する傾向にあるが、H18年に比べて高齢者の「学習」の割合は上昇している。



（出典：総務省　社会生活基本調査）

■「学習・自己啓発・訓練」の種類別行動者率ー高齢者（H１８，２３）

ほとんどの分野で上昇しており、情報処理は3.3ポイントと最も上昇している



（出典：総務省　社会生活基本調査）